

娘家族と生活する為に愛知県、豊川に移って来てからもう半月ほど経つ。町に慣れてきましたか、と聞かれるがその答えは、どうも私の記憶力に係っているようだ。車に乗せてもらって、ナビを使って車で移動しているくらいでは、何回通りすぎても町の姿は記憶に残らない。

車を運転している人は、町中の大きな看板を見て、あそこのスーパーを右へ曲り、次のコンビニを左へ曲りと説明をする。しかしスーパーやコンビニの看板は、文字がいくら大きくても、同じ名前があちこちといくつもあり、頭の中は混乱するばかりである。それで豊川市の地図を買ってきた。でも地図に対応して分る建物は、鉄道の駅と豊川稲荷の屋敷くらいである。他の所は分らない。もっと地道な事をやろうと始めた。

地図を見ながら、歩いたり自転車に乗ったりして、交通信号の下に書いてある小さな地名を確かめた。それを二回、三回と続けていると、歩いている場所の地名と地図上の地名との対応が分り、町の姿が少しずつ分ってきた。これでどこへでも行けそうである。

始めに興味があったのは豊川海軍工廠跡である。地図を見ながら自転車に乗って跡地まで行き、パンフレットを貰い説明を受けた。豊川を知る糸口である。説明によると、廠は、ショウと読み広くて壁のない建物であり、工廠は広い工場を意味している事が分った。今居る所は、昭和十四年に作られた豊川の海軍工廠の跡地の中の平和公園であり、その中の工廠の歴史を学ぶ平和交流館である。DVDを用いた説明があり、空から見た写真では、この地は雑木林や農地が連なっている寒村のように見えた。

ここに軍需工場が出来た理由は、国鉄の東海道線に近く、人口の多い豊橋に近く、広い土地が得られた事であった。この種の工廠は、横須賀や佐世保などにいくつもあった。できあがった武器や弾薬は船で運ばれていた。豊川の海軍工廠では、鉄道で運ぶ事ができた。続いて、昔の火薬庫がそのまま保存されている、工廠の跡を案内して貰った。火薬庫というのは爆発事故を想定して作られている。それは現在でも同じである。残されている実物は、五十メートル四方の土地の周辺に、高さ二メートルの土塁が作られている。その中央に火薬庫がある。火薬庫の天井は薄い弱い材料で作ってある。もし誤って爆発したら上へ抜けて行くように。付属の施設として、水槽や街路灯や色々な種類の防空壕が当時のまま保存されている。防空壕は子供の時代に経験したものと同じであった。

次に住んでいる家の近くにある桜が丘ミュージアムへ行った。そこで豊川の歴史散歩という本を手に入れた。本から豊川の地形、風土、社寺の説明が

得られた。これを元に豊川稲荷を調べた。稲荷は、いなりと読み、五穀を司る倉を祭ったものらしい。稲荷の神の使いとしての狐が信仰されている。曹洞宗を開いた道元の弟子、寒巖禅師がダキニシン天像を作り、その二百年後、東海義易がその像を豊川の地に、曹洞宗豊川閣妙巖寺の守護神として祭った。これが豊川稲荷の始めという。ここは神仏習合が現在にまで残っている数少ない寺である。この稲荷信仰が大きくなったのは江戸時代終りごろのようである。そのころ稲荷信仰は江戸にまで発展し、文政年間には江戸赤坂に豊川稲荷別院が作られている。現在では正月三日間で百万人が初詣に訪れたという。

これくらいの知識を持って稲荷さんの境内に入ってみた。奥の院への参道には千本の幟（のぼり）があり、その幟に全国各地の地名が書かれている。その奥に祈願成就として奉納された石造の狐が何百と並んでいる。幟と狐の数に圧倒される。歴史散歩によると、妙巖寺の本堂には本尊として、千手観世音菩薩像が安置されている。これについて、NHKの心の時代、マンダラと生きる、が解説をしている。手や顔が沢山ある観音像は変化観音といい、密教が盛んになった六世紀ころ、インドで作られた。それが中国を経て日本へ入ってきた密教の仏様である。インドのヒンズー教のビシュヌ神やシバ神が源流である。こうすると、この寺は、稲荷の神様の他に、禅宗や密教のお坊さんを含む習合寺院のようだ。その内容について寺の受付で聞いてみたが、パンフレットを一枚くれただけで説明はなかった。残念である。

明治政府が神仏分離令を出すまでは、日本はどこでも神仏習合だったという。豊川の地を現在の視点から見ると、軍需工場が短時間で米軍の空襲により破壊されたが、その破壊がほぼ工場のみになり、周辺の破壊がなかった。これが、戦後の復興計画を容易にしたように感じられる。